

あの遺跡は今!!

part
5

埋蔵文化財整理調査成果中間報告会



★ 1 松原内湖遺跡



★ 2 西河原宮ノ内遺跡



★ 4 安養寺遺跡・辻野遺跡



★ 3 野村北遺跡

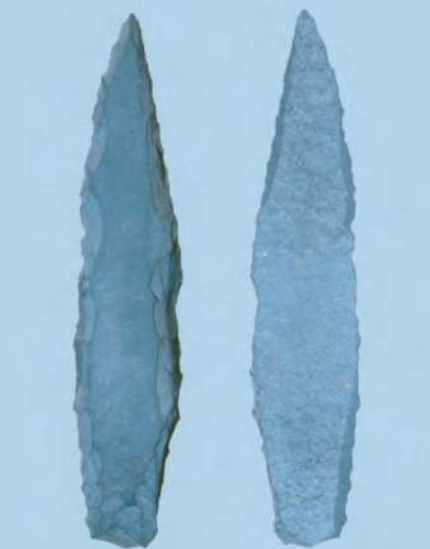


★ 5 堂山古墳群

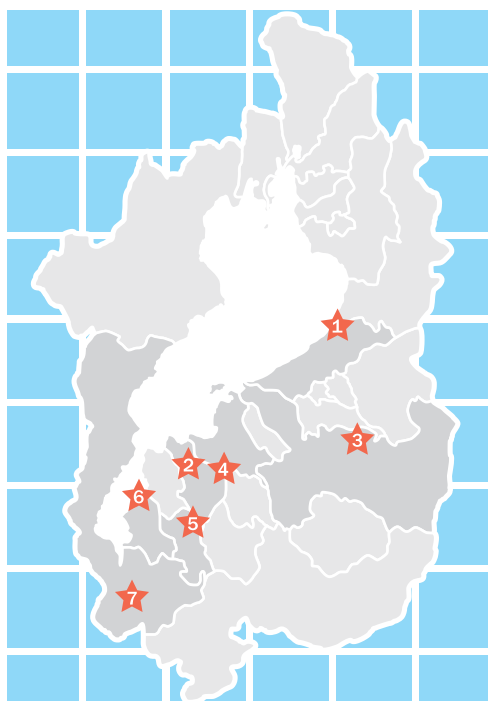
遺跡解説シート



★ 6 志那湖底遺跡・烏丸崎遺跡



★ 関津遺跡



保存処理

平成19年(2007年)8月19日
財団法人滋賀県文化財保護協会
滋賀県立安土城考古博物館

あの遺跡は今

検索

www.shiga-bunkazai.jp

★一谷間の集落

まつばらないこ 松原内湖遺跡（彦根市松原町）

主な時代：縄文時代早期・奈良時代～平安時代（紀元前7000年頃・8世紀～9世紀）



松原内湖遺跡は、琵琶湖の東岸、彦根城北側に広がる旧松原内湖の湖岸に立地しています。遺跡は東部浄化センターの建設や増設工事に伴って発掘調査されており、これまでの調査で、縄文時代から江戸時代にかけて連綿と人々の営みが行われていたことがわかりました。

平成18年度に行った発掘調査では、縄文時代早期の集石土坑、古代(奈良時代～平安時代前期)の建物跡や土器、近世の茶碗などが見つかりましたが、特に注目されるのは古代の^{だてあなじゅうきよ}竪穴住居10棟・柱穴多数・井戸1基です。

竪穴住居の多くでは、煮炊きをしたカマドの跡と考えられる焼けた土の塊が見つかりました。その他の多くの柱穴は掘立柱建物の跡と考えられ、住居や倉庫として使われたようです。

井戸は直径2mの円形で井戸枠のない素掘りのもので、中は多くの土器や石で埋められていました。



松原内湖遺跡の高所から見た入江内湖と伊吹山

調査原因：琵琶湖流域下水道東部浄化センターの建設・増設工事

調査年度 発掘調査：平成18・19年度
整理調査：平成19～21年度（予定）
報告書：平成22年3月刊行予定

関連事項：旧松原内湖（かつてあった内湖で、戦時中からの干拓により現在は耕地化されている） 入江内湖遺跡

調査区全体からも多くの遺物が見つかりました。ほとんどが須恵器・土師器などの土器類です。須恵器は、食事を使う坏・水や食料など入れる甕や壺がほとんどです。土師器は、煮炊きを使う甕や食事を使う皿が多く見られます。

また、井戸からは底部の外面に「山家」と墨で書かれた須恵器の坏(墨書土器)も見つかりました。そのほか、移動式カマドや魚網の錘(管状土錘)、鉄製の斧(袋状鉄斧)や鋸、砥石も発見されています。

調査地点は旧松原内湖のほとりに面した小さな谷にあり、尾根を越えた北側には入江内湖が広がっています。当時の内湖は、琵琶湖を利用した水運の港としての役割もあったと考えられています。

発見した土師器は都や役所でよく使われるものと同じ特徴をもった食器類が多く、須恵器には底部を硯として再利用したものもあります。奈良時代の墨書土器は、県内ではほとんどが役所や寺院から発見されていることから、湖上交通の便の良いこの付近は、物や人の行き来を管轄するような当時の役所の地方出先機関に関わる場所だったのかも知れません。



調査区全景



竪穴住居



「山家」墨書土器(須恵器・坏)

集石土坑：たくさんの石が入れられた穴で、焼けた石が見つかることが多いことから、調理施設と考えられる。県内では、長浜市宮司東遺跡、守山市赤野井湾遺跡、大津市石山貝塚で見つがっている。

竪穴住居：地表を数十センチ掘りくぼめて床面を設ける半地下式の住居。

掘立柱建物：地面に柱穴を掘って柱を立てた建物。地表面が床面となるものと、板などで床を張るものがある。

墨書土器：墨で字が書かれた土器。使用場所や使用者、用途を表すほか、習書(字の練習)、祭祀の吉祥句、まじないの呪句が書かれた。



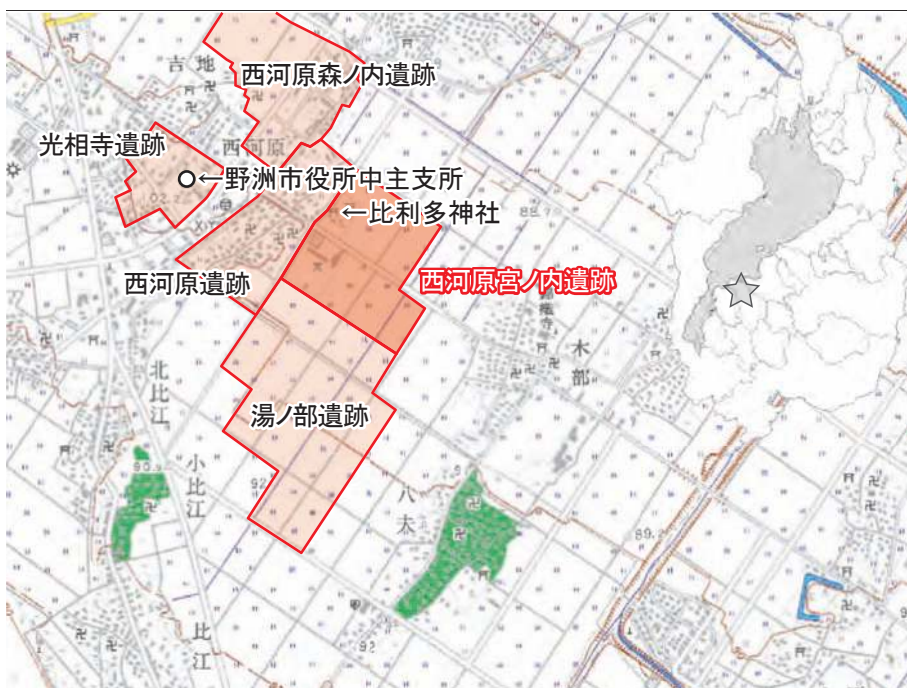
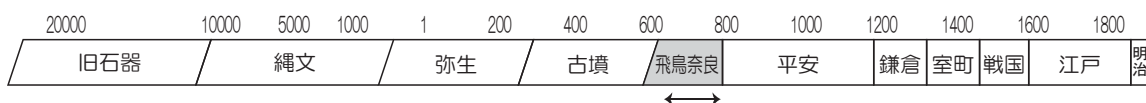
集石土坑

★一木簡と高床式倉庫一

にしがわらみやのうち

西河原宮ノ内遺跡（野洲市西河原）

主な時代：飛鳥時代～奈良時代（7世紀後半～8世紀）



西河原宮ノ内遺跡を含む西河原遺跡群は、野洲川旧北流の右岸沖積地上に立地しています。現状では琵琶湖岸から約3km離れていますが、付近には調査で見つかった倉庫に保管するものを運ぶための港湾施設があった可能性があります。

西河原宮ノ内遺跡は、周辺の遺跡（西河原遺跡・西河原森ノ内遺跡・湯ノ部遺跡・光相寺遺跡）とともに「西河原遺跡群」と呼ばれています。これらの遺跡からは官衙（役所）的な遺物とともに、これまでに130点あまりの木簡が出土していて、中でも全国でも出土例の少ない7世紀後半のものを多く含んでいることから注目を浴びてきました。



調査区全景

調査原因：主要地方道近江八幡守山線道路改築工事

調査年度 発掘調査：平成13・14・16・17・18年度
整理調査：平成19～20年度（予定）
報告書：平成21年3月刊行予定

関連事項：西河原遺跡群（西河原遺跡・西河原森ノ内遺跡・湯ノ部遺跡・光相寺遺跡）

平成13年度から18年度の調査では、7世紀後半から8世紀前半にかけての掘立柱建物と溝が見つかりました。どちらも南北方向を向いていて、方角を揃えて建物や施設が計画的に築かれています。

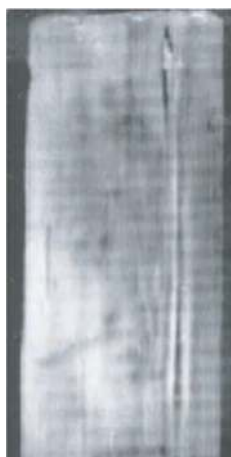
建物のうち、4×5間全面に柱を据えている総柱の建物は、重量物を納める高床式倉庫と考えられます。写真の倉庫跡の床面積は約45㎡あり、当時としても大型のものです。このような規模の大きな倉庫が遺跡内に計画的に配置されていることが調査により明らかになってきました。このことから、これらの建物は公的な施設であると考えられます。

遺物では須恵器・土師器などの土器とともに、木簡が出土しました。この遺跡からは須恵器の硯や木簡の削りクズも見つかっています。また、過去の調査では、役人が腰に締める帯（ベルト）の飾りも見つかっていますので、この遺跡で役人が木簡を書いていたことがわかります。

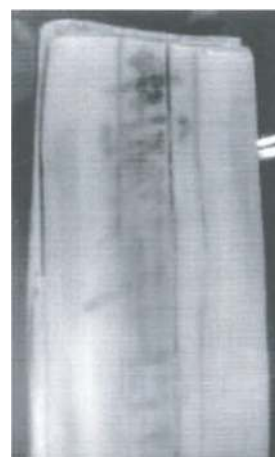
平成18年度の発掘調査で出土した木簡には「辛卯年」（持統5年＝691年）などの年号のほか、稲の貸し付けに関することが書いてありました。これらの木簡が大型の倉庫の柱穴から見つかったことから、7世紀の終わりにこの地で貸し付け用の稲を管理していた実態が明らかになりました。



大型の高床式倉庫の柱穴

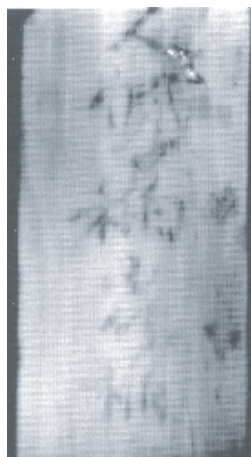


辛卯年



壬寅年正

紀年銘木簡(赤外線写真)



人貸稲
□ 稲



□ 稲
冊 □ 稲

貸稲木簡(赤外線写真)

高床式倉庫：発掘調査では、見つかった柱穴の配置状況だけではなく、他の遺構との位置関係等を考慮して建物の機能を想定する。今回は総柱建物が計画的に配置されていることから高床式倉庫とした。

木簡：薄い木の板に文字がかかれたもの。荷札のほか、帳簿・伝票・記録などの文書として利用された。

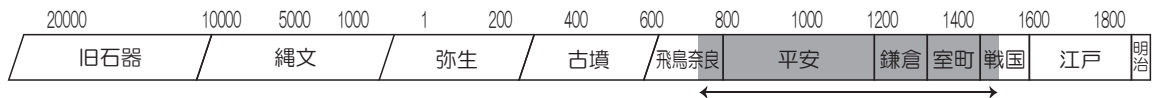
貸稲（出拳稲）：出拳とは古代律令制のもと広く行なわれた利息付賃借である。出拳稲とは、出拳の本稲として百姓に貸し付け、その利稲によって運営された官稲のことで、税としての稲の出拳は公出拳と呼ばれた。稲・粟の公出拳の利息は5割、その他の利息は10割を限度とした。

3

—古代～中世の遺物を確認—

のむらきた 野村北遺跡ほか(東近江市野村町)

主な時代：奈良時代～室町時代（8世紀～15世紀）



野村北遺跡は、『日本書紀』や『万葉集』で有名な蒲生野の北辺、愛知川の左岸に位置しています。北西には箕作山、東には鈴鹿山脈、南には布引丘陵を見ることができます。現在、一帯は水田として利用されており、南東には野村の集落が広がっています。

これまで、野村北遺跡は、中世の遺物を中心とした遺物の散布地として知られていました。発掘調査の結果、主に奈良時代の住居跡と室町時代の石組みを持つ溝が検出されました。その時期の野村周辺を見てみると、布引丘陵東部の南縁辺部と日野丘陵北縁辺部では、奈良時代から平安時代前期まで須恵器・瓦窯が営まれます。平安時代になると、蒲生野が開発され荘園が経営される様になり、当時開発された条里制じょうりせいの名残が今でも色濃く認められます。



竪穴住居跡

調査原因：県営経営体育成基盤整備事業

関連事項：蒲生野、条里制

調査年度 発掘調査：平成18年度

整理調査：平成19～20年度（予定）

報告書：平成21年3月刊行予定

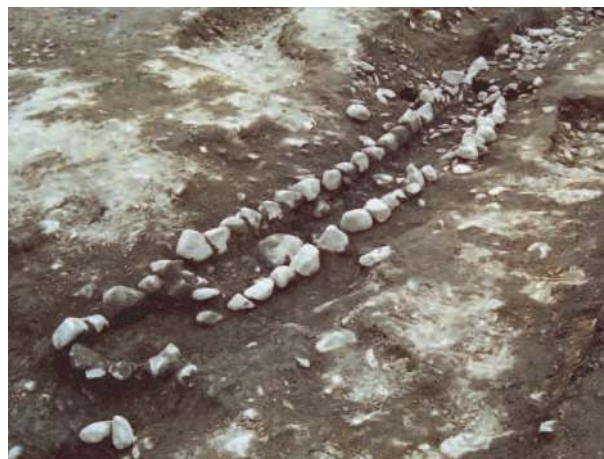
その後、室町時代後期から戦国時代にかけては、周辺の山には長光寺城や大森城などが築されました。

今回の調査で出土した遺物を時代順に見ると、まず、奈良時代は、竪穴住居から出土した遺物を中心に須恵器の壺・甕・皿・坏、土師器の皿・坏があります。

つづく平安時代は、溝と土坑から須恵器・土師器・近江型の黒色土器・緑釉陶器などがあります。これらは、同時期に使用した容器類のセット関係を調べるのに貴重な資料となります。また、土師皿に注目してみると、湖西地域に多く出土する底部に糸切痕を持つ皿に共通する特徴のある皿が出土していることがわかりました。野村北遺跡と琵琶湖西岸とのつながりが想定できます。

鎌倉時代から室町時代としては、溝と土坑を中心に須恵器の甕、土師器の皿・碗、鉄鎌などの遺物が出土しています。鉄鎌は、土坑から石の上に2点が重なった状態で出土しました。また、別の土坑からは、室町時代の土師皿がまとまって出土しています。

これらの調査成果から、これまで文献などでもよく判っていなかった古代の野村周辺の実態が明らかになり、地域の歴史を考えるにあたって貴重な調査であったと考えられます。



石組みのある溝



底部糸切痕を持つ皿と持たない皿



重なった状態で出土した鉄鎌

条里制：農地開拓のための耕地の地割制度で、大化二年（646年）に行われた班田収受により、一定の口分田を班給することに基づくもので、平安時代初頭のころまで、その制度が続いた。

底部糸切痕：土器や陶器などを形づくる時に底を糸で切り落としたもの。
ロクロを回転させて切ると、底に一種の巻き文の痕跡が残る。
ロクロを静止させた状態で切ると、曲率の小さな円弧の平行線が痕跡として残る。

★4—安養寺廃寺関連の遺物—

あんようじ つじの 安養寺遺跡・辻野遺跡(近江八幡市安養寺)

主な時代：古墳時代～平安時代・江戸時代（6世紀末～9世紀・18世紀）



安養寺遺跡と辻野遺跡は隣り合った遺跡で、日野川とその支流である光善寺川・善光寺川に囲まれた沖積地に立地しています。南西には鏡山丘陵がせまり、野洲市および竜王町と境界を接しています。現在一帯は水田に利用され、一部の微高地が畑地として利用されています。

今回の調査地点の南東には、白鳳寺院として知られている安養寺廃寺があり、一帯では古くから布目瓦や土師器が採集されていました。この寺院は、『近江輿地志略』には巨大な伽藍が存在していたこと、『近江蒲生郡志』には元龜2年(1571年)に織田信長によって焼かれた為に廃れたと記述されています。周辺には安養寺廃寺に関する遺品も多く残り、鎌倉時代の石造り五重塔、莊嚴寺に3体の仏像や下馬石などが安置されています。

また、南方の鏡山山麓には、県下最大級の須恵器窯である鏡山古窯址群や小山古墳群、穴倉古墳群などがあります。



江戸時代の導水管

調査原因：県営農業農村整備事業

調査年度 発掘調査：平成18年度

整理調査：平成19年度（予定）

報告書：平成20年3月刊行予定

関連事項：安養寺廃寺、鏡山古窯址群、穴倉古墳群

今回の調査では、古墳時代から江戸時代にかけての遺構を検出しました。

時代別に主な出土遺物を見てみると、古墳時代は須恵器の壺・^{はそつ}甗・坏があります。これらの遺物は、安養寺の周辺に展開する小山古墳群・穴倉古墳群などに関係する可能性が高いと考えられます。

古代の遺物としては、瓦、須恵器の坏蓋・皿・甕・浄瓶・高坏、土師器の皿などが出土しています。遺物の多くは、安養寺廃寺に向かって伸びる溝から出土しました。なかでも、瓦と浄瓶は安養寺廃寺との関係が深い遺物と考えられます。瓦は、軒丸瓦の破片のほか、平瓦、丸瓦が出土しています。今回出土した「^{たんべん}単弁^{はちようれんげちんのきまるがわら}八葉蓮華文軒丸瓦」は蓮の花をデザインしたもので、白鳳寺院の軒先を飾っていました。また、同文の瓦が周辺でも採集されています。

浄瓶は、仏前に供えるための聖水を入れた容器で、寺院跡でしばしば出土するものです。また、この溝からは、墨書土器も出土しています。文字は[田次口]と読めます。

江戸時代の遺構としては、上水道に使用した竹製の導水管跡も検出されました。

今回の調査で確認した遺構と遺物により、古墳時代の集落が周辺に広がっていると考えられます。また、安養寺廃寺に関する新資料を得られたことは貴重な成果といえます。



古墳時代遺物出土状況



安養寺廃寺に向かって伸びる溝



溝から出土した墨書土器

軒丸瓦：軒先に使用される瓦で、瓦当部に文様を持ち、その文様により年代や系列が特定される。

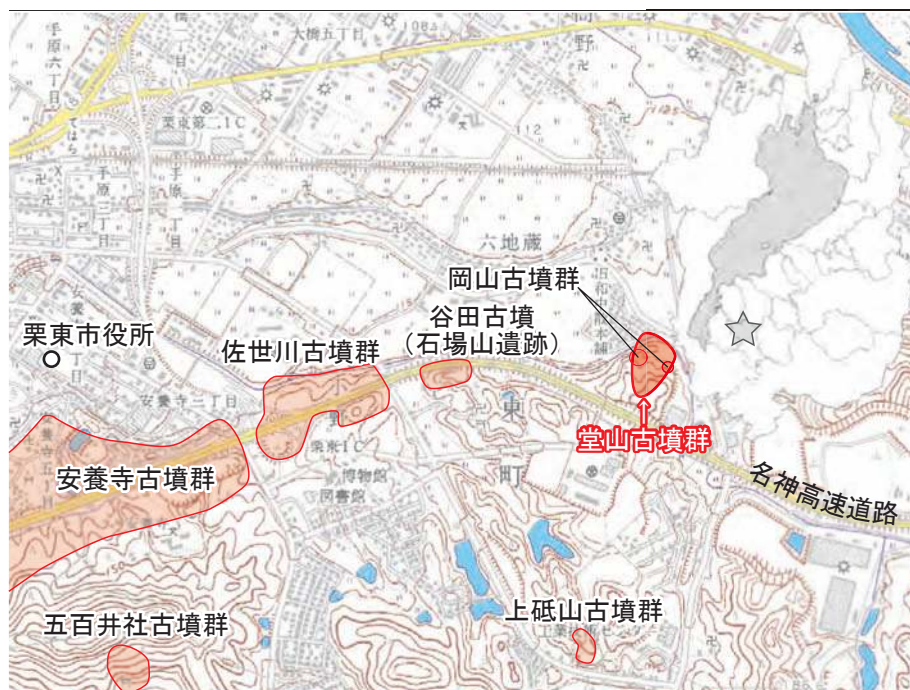
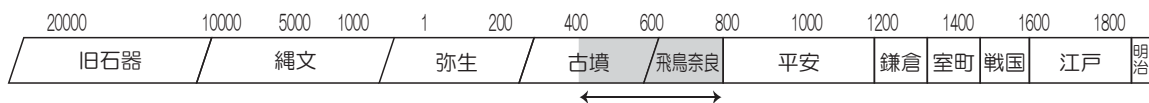
浄瓶：須恵器のほか、灰釉陶器、輸入品の青磁・白磁のものが知られる。

★5 新たな古墳と未知の古墳

どうやまこふんぐん

堂山古墳群 (栗東市六地藏)

主な時代：古墳時代中期～奈良時代（5世紀～8世紀）



堂山古墳群は、名神高速道路の北側に隣接する丘陵に分布する古墳時代中期から後期にかけての古墳群です。

同じの丘陵には、銅鏡が2枚出土している岡山古墳が存在します。

また、周辺にも安養寺古墳群などの古墳群が多く存在しています。

堂山古墳群はこれまでに3基の古墳の存在が知られており、そのうち1基は横穴式石室を埋葬施設とする後期古墳であることがわかっています。

今回の調査では、山頂で新たな古墳を1基発見することができました。また、この古墳の北側には尾根に直交する溝が見つかりました。さらに、調査区西側の斜面では、治山跡も見つかりました。



調査区全景

調査原因：栗東水口道路1 栗東東インターチェンジ建設事業

調査年度 発掘調査：平成17・18年度
整理調査：平成19～20年度（予定）
報告書：平成21年3月刊行予定

関連事項：岡山古墳・谷田古墳・^{させかわ}佐世川古墳群・^{あんようじ}安養寺古墳群・^{いおのいしや}五百井社古墳群・^{かみとやま}上砥山古墳群

調査区の山頂で新たに見つかった古墳は、直径10m、高さ2.4mの円墳です。墳頂部は平らで、中央付近から遺体を納めた木棺の痕跡が見つかったことから、木棺直葬墳と考えられます。棺を納める墓壇からは滑石製の管玉が1点見つかりましたが、他に土器などの副葬品はありませんでした。

円墳から北側に約20mの地点では、尾根に直交する溝が見つかりました。溝の幅は3～8m、深さは最大1.5mで、溝の底から南側にかけては傾斜が緩いのに対して、北側は急角度に地面を削り出し、尾根を分断しています。ここからは須恵器の坏・壺・甕・甍が出土しましたが、そのほとんどが古墳時代後期のものであり、古墳の副葬品として使用されることが多いものです。このことから、溝の北側にはこの時期の古墳がさらに存在する可能性があります。なお、一緒に奈良時代の坏蓋と平瓦、石製の硯がそれぞれ1点ずつ出土していますが、調査区内ではその時期の遺構は見つかっておらず、この場にもたらされた経緯は不明と言わざるを得ません。

調査区の西端の斜面では、幅3.5～8m、奥行0.5mほどの段が11mにわたって雛壇状になっていることがわかりました。斜面に平行するように、山の地肌を削り出して造成していることから、植林などをして山を整える治山の跡と考えられます。



円墳全景(木棺直葬墳)



円墳の北側で見つかった溝



治山遺構



左写真の撮影状況

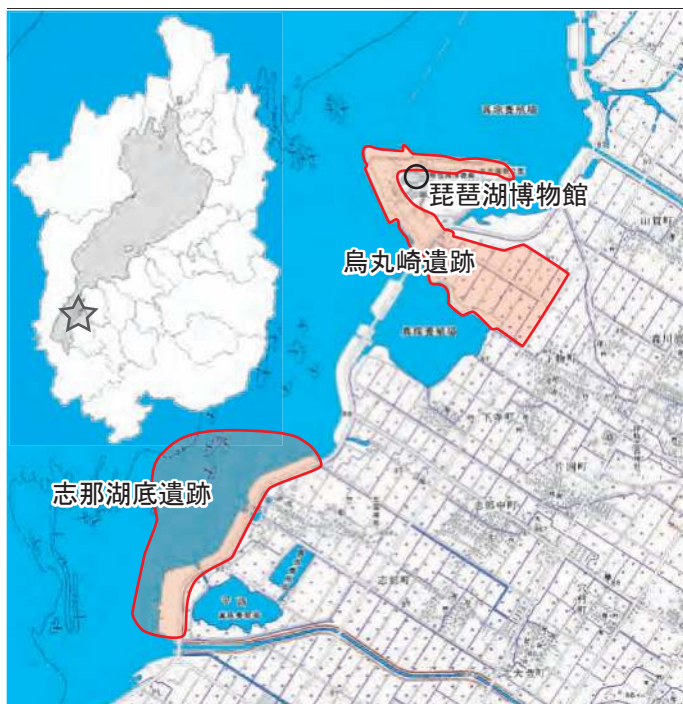
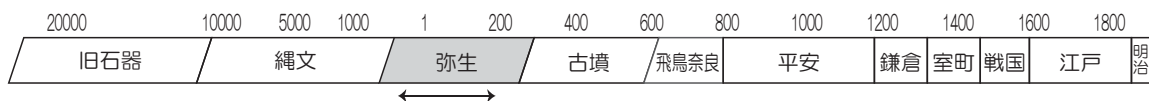
- 円 墳：古墳時代を通して最も多く造られた平面形が円形の古墳。最大のものは直径約100mの埼玉丸墓山古墳。ちなみに最大の古墳である大仙古墳(仁徳陵古墳)の後円部径は約250m。
- 古墳群：一定地域の中にまとまって存在する古墳。小規模な古墳が密集して数多く存在する場合は特に「群集墳」という。
- 管 玉：円筒形で中央に貫通する孔があり、紐で連ねて装身具とする。縄文時代に少数例が報告されているが、弥生時代以降に盛行する。碧玉・緑色凝灰岩・水晶・メノウなどの石製、ガラス製、金属製がある。

★6 一弥生時代の石器と玉造り一

しなこてい からすまざき

志那湖底遺跡・烏丸崎遺跡（草津市）

主な時代：弥生時代前期～中期（紀元前4世紀～2世紀）



志那湖底遺跡の約2km北には、琵琶湖博物館などがある烏丸半島があり、ほぼ全域に縄文時代晩期～弥生時代中期の烏丸崎遺跡がひろがっています。烏丸崎遺跡は、県内でも最も早い時期に弥生文化が波及・定着したムラであり、弥生時代中期には100基を超える数の方形周溝墓ほうけいしゅうこうぼが作られる等、赤野井湾～志那沖地域において中心的な場所であったことがわかりました。

草津市の志那沖は、昔から弥生時代の銅鐸や石器が採集されることから湖底遺跡として知られていました。発掘調査の結果、縄文時代後期～晩期の土器棺墓や弥生時代中期後葉の土器・石器を初めとして、^{はやま}葉山川下流域の歴史を解明する上で貴重な資料を得ることができました。



遺跡遠景

調査原因：琵琶湖総合開発事業

志那湖底遺跡 調査年度 発掘調査：昭和57年度～平成2年度
整理調査：平成19～24年度（予定）
報告書：平成25年3月刊行予定

烏丸崎遺跡 調査年度 発掘調査：昭和57年度～平成3年度
整理調査：平成12～19年度（予定）
報告書：平成20年3月刊行予定

関連事項：服部遺跡・小津浜遺跡・大中の湖南遺跡・木偶

志那湖底遺跡と烏丸崎遺跡からは、弥生時代や弥生文化に特徴的な石器、遺跡の性格を表す石器・石製品が出土しています。

弥生時代の石器の最も大きな特徴は、水稻農耕技術と共に中国大陸・朝鮮半島から伝わった石の道具類です。石を研磨して一定の形に整える磨製石器の中でも、太型蛤刃石斧・扁平片刃石斧・柱状片刃石斧は、木製農具を作る上で欠かすことができず、「道具を作るための道具」の出現にも大きな意義があります。また、収穫具である磨製の石包丁も弥生時代ならではの石器の一つです。

次に特徴的な石器は、青銅や鉄製の剣や鍬を模した磨製石剣・磨製石鍬です。いずれも弥生時代に特徴的な石器ですが、実際に武器として使われたのではなく、祭りや儀式的の道具として作られ、使われたようです。

滋賀県内には、翡翠・碧玉などの玉石材の産地はありませんが、弥生時代に玉造りを行っていたムラがいくつもあることがわかっています。その中の一つである烏丸崎遺跡は、弥生時代前期末～中期初頭には玉造りを始め、中期に作られた方形周溝墓の木棺の中にも副葬品としておさめられています。科学分析の結果、翡翠は糸魚川流域、碧玉も日本海沿岸からもたらされたものであることがわかりました。また、石針や石鋸等の玉造りに特徴的な石器が、工房として使われた竪穴住居跡から多量に出土しています。



3種類の磨製石斧



磨製の石包丁(左下)と石剣・石鍬



玉造り工房



翡翠製勾玉と碧玉製管玉・小玉

湖底遺跡：水位上昇等により、現在は湖底～湖岸に位置する遺跡で、琵琶湖周辺で100箇所を超える。

方形周溝墓：溝に囲まれた方形の低墳丘の墓で、弥生時代を代表する墓制の一つである。

磨製石器：粗割・敲打によって大まかに成形し、最後に砥石で研磨して仕上げる石器である。

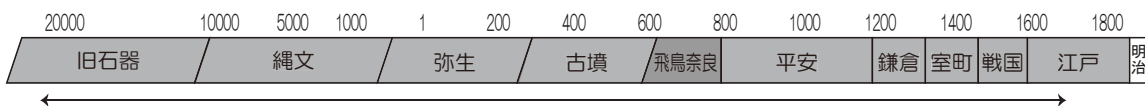
石針・石鋸：直径数mmの穴を開ける石針は瑪瑙製、石材を擦り切る石鋸は和歌山～徳島の紅簾片岩製。

★ 後期旧石器や古代の道路跡

せき の つ

関津遺跡 (大津市関津1丁目・5丁目)

主な時代：旧石器時代～江戸時代（2万年前～17世紀）



関津遺跡は、琵琶湖から唯一流れ出る瀬田川の左岸、田上山系南麓の低丘陵に立地しています。

遺跡名でもある関津の地名は、古代の関所を示す「関」と港を示す「津」に由来すると考えられます。また、田上山系は良質な木材の供給地であったことが『万葉集』に歌われています。

関津遺跡の平成17年度の調査では、後期旧石器時代の石器が、現在の地表面から約1m下の縄文時代以前に形成された地層から1点出土しました。この石器は、その特徴から角錐状石器と呼ばれ、これまでの調査・研究で、約2万年前～約1万5千年前のものと考えられます。九州から東北地方にかけて分布しますが、九州から瀬戸内海沿岸地方で多く出土しています。近畿以東での出土例は少なく、石器の大きさも東へ行くにつれて小型化することなどがわかっています。

関津遺跡の角錐状石器は、県内で初めての出土であり、縄文時代以前に形成された地層から出土した後期旧石器としても初めてで、県内で出土した石器のなかでも最古級の石器です。



角錐状石器

調査原因：県営ほ場整備事業
国道422号建設

調査年度：発掘調査 平成15・16・17・18年度
整理調査 平成16～21年度（予定）

関連事項：保良宮・京、近江国庁、藤原仲麻呂、田上山作所

報告書：ほ場整備Ⅰ 平成19年3月刊行（平成15年度調査分）
ほ場整備Ⅱ 平成21年3月刊行予定
ほ場整備Ⅲ 平成22年3月刊行予定
国道422号 平成20年3月刊行予定

平成15～18年度の調査では、後期旧石器時代の角錐状石器のほか、縄文時代は、草創期の石器、後期の落とし穴や土器・石器、晩期の墓、弥生時代は後期の竪穴住居・溝、古墳時代は川跡、飛鳥時代は集落跡や国内最古級の墨書土器、奈良時代から平安時代前期は道路跡と公的施設群、平安時代中期は木簡・畠跡、平安時代後期から鎌倉時代は集落跡・畠跡、室町時代は港湾施設の一部、江戸時代は屋敷を囲む堀の可能性が高い溝などがみつかっています。

弥生時代後期の竪穴住居は9棟確認していません。調査で見つかった住居は、集落の一部と考えられます。

奈良時代から平安時代前期の道路跡は、両側に側溝をもつ幅18mの規模で、南北方向に約250mの区間を確認しています。道路の東西両側では井戸や70棟以上の建物跡のほか、墨書土器・硯・土馬・製塩土器・緑釉陶器・瓦・帯金具・木沓など一般の集落ではあまり出土しないものが多数出土しています。道路跡は『続日本紀』に記述のある「田原道」、道路沿いの建物群は役所などの公的施設と考えられます。そして、道路や公的施設は、「保良宮・京」の造営や「近江国庁」の整備と密接な関係をもつと考えられます。

平安時代後期から鎌倉時代の集落跡からは、県内の同時期の遺跡とは違って、大和型瓦器・輸入陶磁器など近江以外から持ち込まれたものが多数出土しています。



弥生時代後期の竪穴住居



道路跡と建物群（奥は瀬田丘陵）



平安時代後期の建物

県内出土の後期旧石器：大津市（粟津、蛭谷、瀬田大池、田上山）、野洲市（小堤、夕日ヶ丘北）、東近江市（庚申溜）、虎姫町（北山古墳）から、ナイフ形石器などが出土している。

田原道：奈良時代、天平宝字8年（764）、反乱を起こした藤原仲麻呂が近江国庁に向かったため、追討軍は「田原道」を通して先に近江に入って反乱を制したことが『続日本紀』に記されている。

保良宮（京）：奈良時代、天平宝字3年（759）から6年にかけて造営されたが、未完成に終わった。位置は、大津市晴嵐小学校周辺に推定されている。

保存
処理

一井戸の復元展示一

せきのつ

関津遺跡（大津市関津一丁目）

主な時代：鎌倉時代（13世紀）



大津市関津遺跡における平成15年度の発掘調査では、残存状態の良好な井戸が検出されていました。今回、その井戸跡(S143)から取り上げられた井戸枠材の保存処理が終了し、井戸の遺構を復元しました。

井戸枠材に使用されている木材の種類は、樹種同定の結果ヒノキを含む針葉樹材であることがわかりました。長い間地下に埋もれていたため木質が柔らかくなっていたことから、木材強化のための保存処理を実施しました。

保存処理の方法は、PEG(ポリエチレングリコール)含浸法を採用しました。この処理法は、木材の細胞のなかにPEGと呼ばれる水に溶けるロウのような合成樹脂をしみこませて強化する方法です。まず、保存処理の前に井戸枠材をよく洗い、土や砂などを取り除きました。次に、井戸枠材をPEG含浸装置のなかに入れて、含浸装置を60℃に加熱し約10カ月かけてPEGの濃度をゆっくりと上げながら処理を実施しました。



井戸枠出土状況（関津遺跡S143）

PEGの濃度がほぼ100%に達した時点で含浸処理を終了し、井戸枠材を含浸装置から取り出して、温水で洗ったあと乾燥しました。そして、井戸を復元するために展示用の台を作って、井戸枠を復元しました。

出土遺物の保存処理：発掘調査で出土する遺物には様々な材質のものがある。遺物の材質・性質に応じて適切な処理を実施することにより、後世に残していくことができる。また、展示等での活用も可能となる。



PEG含浸装置

PEG 20kg入袋

— 保存処理の工程 —

- ①乾燥防止などの応急処置と取り上げ
- ②水漬けによる仮保管
- ③事前調査(樹種同定、劣化状態の調査)
- ④含浸処理の準備(養生・梱包)
- ⑤保存処理(約60℃でPEG含浸処理)
- ⑥含浸処理の終了(取り出し)
- ⑦乾燥(室温で固化)
- ⑧表面処理
- ⑨保存修復(接合、充填、成形、補彩)
- ⑩展示と活用



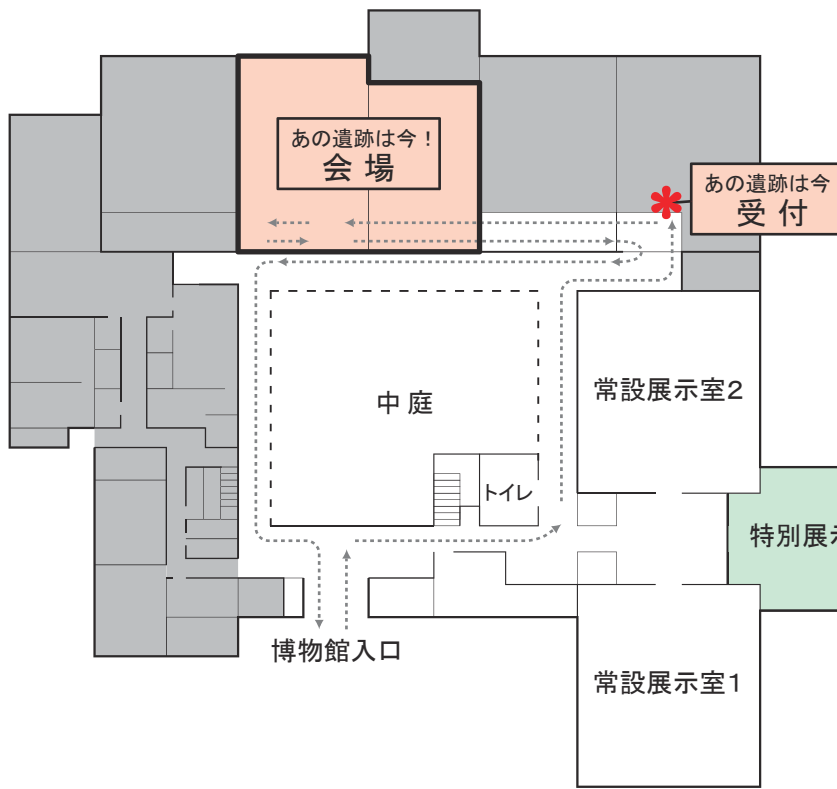
井戸杵材をPEG含浸装置の中に入れる



含浸処理の終了(乾燥中)



井戸杵の復元作業



- ◎「あの遺跡は今！」の受付にて、資料とアンケートをお受け取り下さい。
- ◎レプリカアクセサリ-製作コーナーの参加は受付にてお申し込み下さい。
- ◎アンケートの記入・回収も受付にて承ります。

開館15周年記念 第34回企画展 ～9/9(日)まで
 (財)滋賀県文化財保護協会成果展

城と城下町

—彦根藩と膳所藩を中心に—

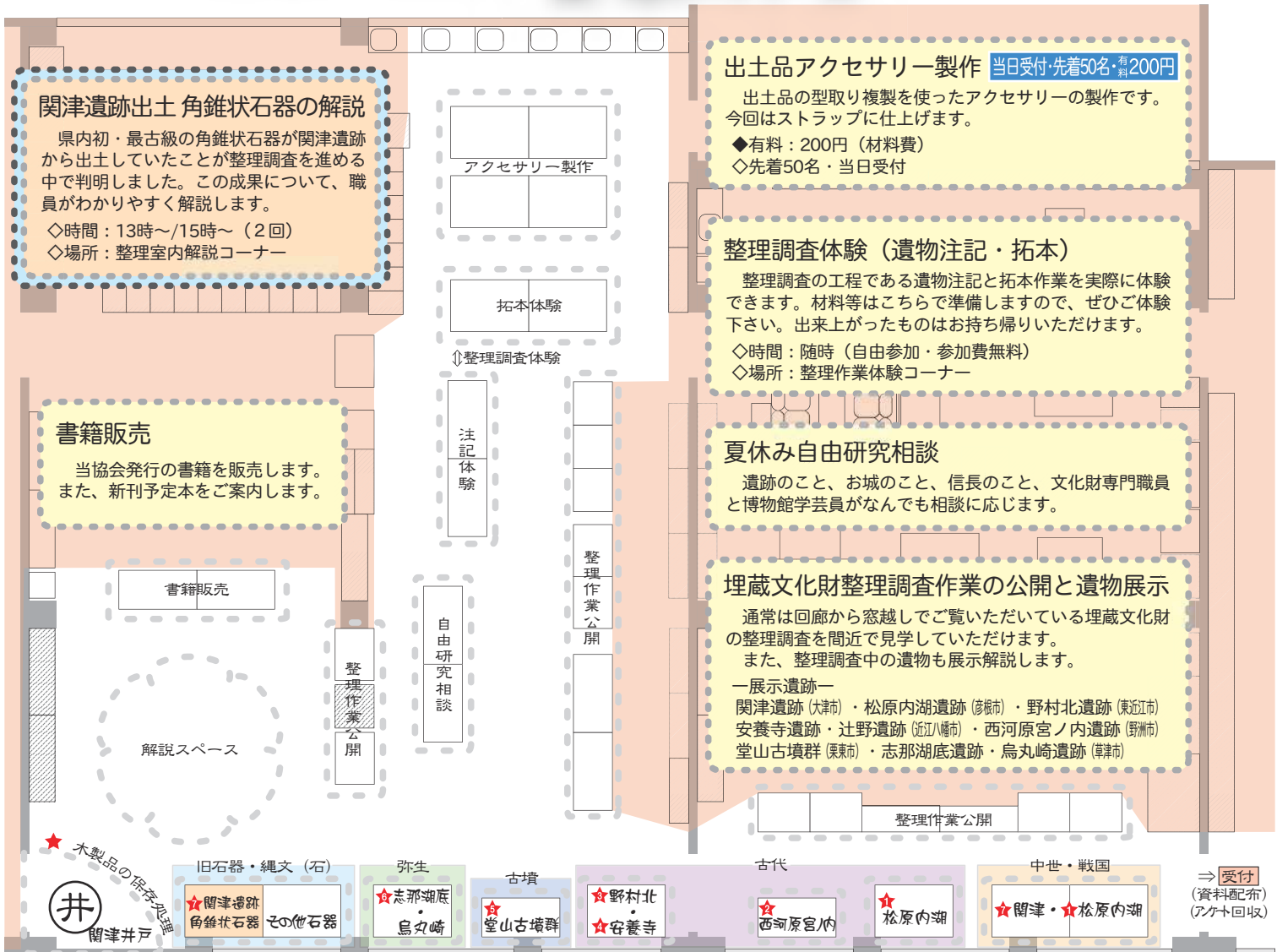
彦根城表御殿跡や彦根城武家屋敷跡、膳所城下町遺跡から出土した資料を中心に、城と城下町の成り立ちとその歩み、そして城下町に住む人々の暮らしについて展示しています。

夏見城遺跡出土の“毛抜き”も展示しています。こちらも是非ご覧ください!!

なお、本日は「家族ふれあいサンデー」のため、県内在住の家族連れは無料です。

あの遺跡は今! part5 会場レイアウト

■ : 立入禁止区域



回廊・中庭